繪本豐臣勲功記

七編九

特へ遠13
2209
69

繪本豊臣勲功記七編巻之九　目録

後葺基次伏強弩擒玄蕃　屬　业庄牢城
黒田伏兵盛改と待図
玄蕃捲六橋ろく図
羽柴殿入越前直攻业庄　屬　父子對面
文荷斎茶器を推く図

へ遠13
2209
69
巻

勝家倉悲對面盛改勝久　小谷約庵

同図對面

勝家以三女送羽柴殿陣　三女賢行

三女別離の舞を作図

三女羽柴の陣へ送らる図

繪本豊臣勲功記七編巻之九

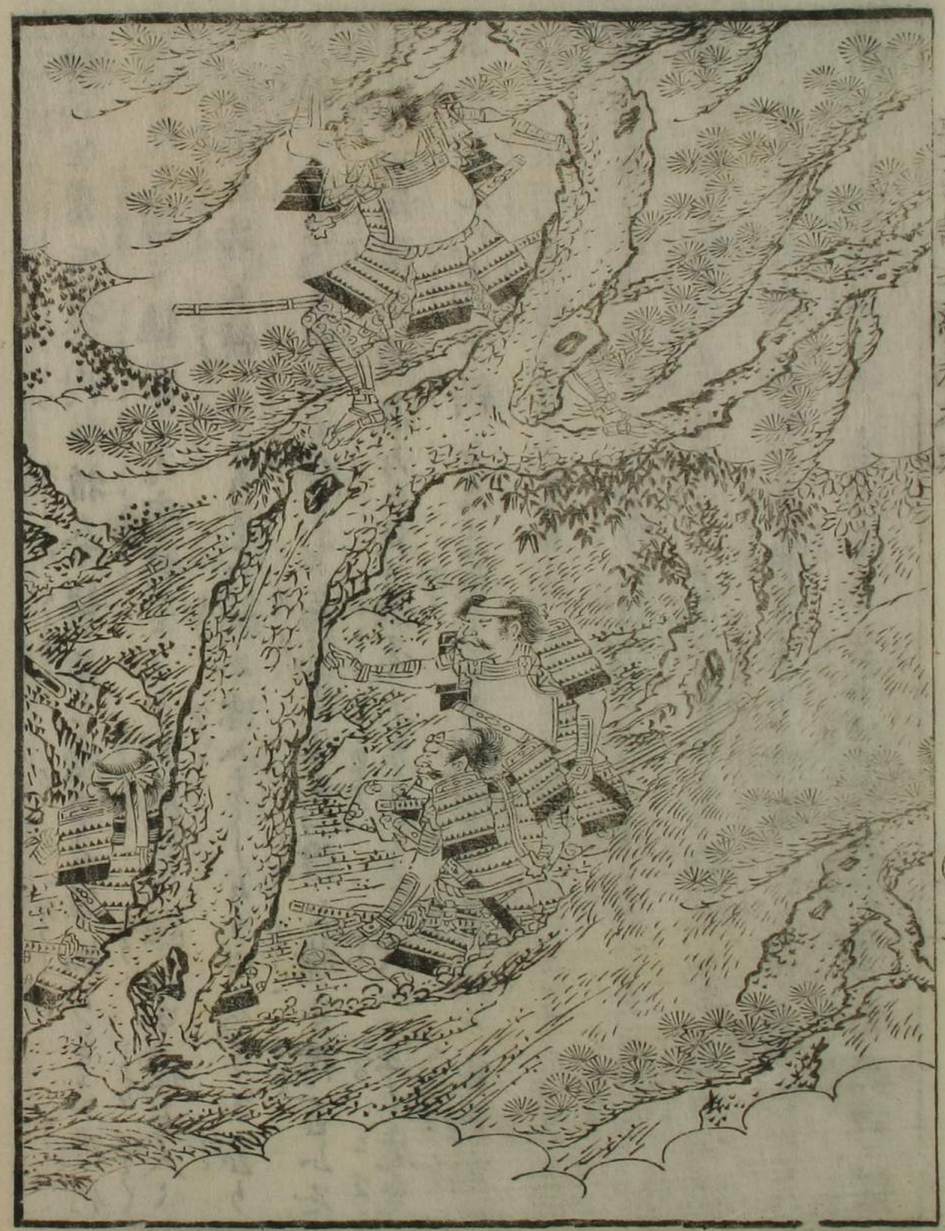
江戸　八功社　徳水　刪補

後爰基次伏強兵擒玄蕃　属北庄城

天正十輪の日あり。しも。羿よくこれ射て九日ハ中。邪蘇の道ハ横さいるく。天上まく新の如し。豈剃や人間をや。粤ハ游て況黒田官兵衛孝高い。後爰基次の深慮ハよろこ。獄の扶寨を持堅。左右あく玄蕃を欺課せ。犬故を終ハ拒抗しい其切。外ハ雙ぶ者ハ有ハとりへ。いまゞ良故将を擒拘得ざれば。強望誉功を頒さざゃと。主後ころ戎頻しる。其ゞあらふも又ハ糸い。孫亀ハ紹る名士ハ也べ。軍の本末豫よくこれ戎悟察し。弦勢と偕ハ孫伍と操生。渉嶽より

西北の方。一里ばかり突発して。笹尾嶺に悄然と附置。敵軍の行方を窺せる。秋もはや暁に近き頃。笹尾の細路走戻り。悄く地に報ずることあり。これに因て後藤基次。主人孝高にふうち嚮ひ。公今日の合戦に。切あしと憂ひ。ふ。先に居ぶ導きして。功誉せさせもふさべし。諸手もふ官兵へ孝高主従。頓て後藤の智勇の量を。感服して在る由。各指揮に漏まじと。答えるに基次。然らば雑兵は皆都て。こゝに留めて騎馬武者のみ。強兵撰出て三十余騎我に続て来りまへと。諸手を従警得て。三十騎人乾べ。亦兵正先に諸導しつ。横浪山の間道伝弛。敵賀戦の陣山幽谷。出在家邊より戦場に投り。山中嶺の

難所を當て。密樹を推分繁草を竇り。涯知らぬ進行に。はや人蹟も絶果て。方格とぶ辨得ぬ。跟辺に後ふ人い。唯赤き湯を使とし見べ。剰に涙入ぶ〳〵る由。こゝに歩りて。所〳〵て。これいづくを目的として。進と搦に行まふぞと。吳に因様に呼れる。後藤亦兵衛ち笑ひ。源〳〵虎兄に投ぜんば。兄を得ること難ふ。方僅要時ぞ程艱難へ。殺時獲物のいとまんと。いひて路を急ぎ行ぐ。遠地や絶頂ぶんとおがえて。薫風樹の間を吹穿つに。又兵衛四方を儼と窺ひ。是戦場の山中に出ば。遠所こそ兄竟の傷而ありもこの大樹の陰に人殺を經め。腰兵糧あど奥たせて。義来る敵を待居う。然ちど佐久間玄蕃允盛政の策



黒田主従
山中ゟ埋
伏しそく盛
政勝久を
待つ

りゝ始終都て做損じ。自分躍くゝ走りくるゆゑ。七方の勢ふ渭合して。再戦の事を促し。一命を的ふるけ。林業ゞ布陣ふ潛入り。覘整ふせんとせしゝ。ゆゑ。吉天運強ふして。迫若得ること偏ゞく。鬱鬱をしつゝも退逸し。時歳十六歳ありゝる。勝家の子息。權六勝久を伴ふゝ。大敵の中を衝くゝふ遁出。正西へ純てゝ塩漬ふ出。それより壯方ふ馬を向。野に載して。敦賀の方へ向歩。山中嶺ふ當羅り。經を求めて落涙心い。舎利の亟を雪ゞんさゆ。ゆり。既返所へ来りし頃い兵糧の貯も盡果。飢ふ臨で困もとゝ人ども。食併ふゝ見ばまもゝ疲労し。郷方ふ攀ていい来のゝを指。遠方ふ下ていい熟梅を拾ふて。辛くも渭を凌ぎつゝ。山中嶺の央路ふ到きべ。迫ぢき

敵もたやふゝじと。ん緩くして歩行を除くとし。權六勝久城渡助ふして。漸ゝ絶頂ふ来蒐るころ。領て亦兵来墓次へ。隣あゝゝ杉ぶ枝ふ攀蹄。佐久間の来る所窺在ゝるゞ。それを視ろゝり翻流と跳卸。勇士達ふ目注して。手攝索幸合蒐ゝり。斯とも知らぎ玄蕃權六。徑と傳ふて通行ところ成。黒田の勇士。毋里太右兵。菅六之助の西人ゞ。荊棘の蔭より露出。捕ゝりと声掛ゝ。雙方より撲爭着を。玄蕃得ゝりと。二人と對手ふ扭合しゝ。背面ふ黒田三左兵つ。佐久間ゞ左足無改と捉ゝ。即場ふ撞ゝ拮僵せ。六臂六足擁へらせ。了得ふ猛を盛改も。遂ふ左右の腕扭折せ。ゝる肱をふゞ鋳せらせゝり。後首ふ名兵基次へ。玄蕃ゞ跟ふつゞひゝる。權六勝

後藤
又兵衛智綱を
張り盛政
勝久と活拘る

久ぐ猪ゝる馬の。茅足投て扭倒し。馬ゝ落る権六と。その侭
捕て膝下ゝ擁へ。左右ゝ縄ゝ羅ゝゝる。黒田文子大ゝ
悦び。自分の猪雷士それ〳〵ゝ功名讃譽をゝきとゝ人ども。
これ分僅佐久間柴田の二将を。拉拘ゝるゝ場ものゝ是
拔群と謂つべきゞ。これも金基次ゞ智謀ゝ〳〵でハ迫ぶもの
きと。孫くもゝくこそ謀りつもと。続紀てゞ西勇の。活捉と拉
紀こと。本陣留して弛疲ゝり。弧馬ともて迫由と言保せしゝぶ。
大将秀吉歓びゝふこと限りゝく。孫ゝ後義基次ゞ。孫智
の量を稱義しゝひ。玄蕃権六両人と。山口甚兵衛。副田
多左衛ゝ安属らも。食餌飯叮嚀ゝ既へ。魁平を緩め
て洗ゝふどさせ。心を投てゞ労切る。備太就茅國足羽郡。

北の庄の城中ゝハ。此節城の後霞の最中ゝて。牢城をべふ後ゝ
も遠ゞ。賸牢居の人くゝハ。老幼あるひハ婦女るのゝ防
禦の役ゝ達ものゝふきと。當日廿一日の定昏時ゝ。磐の頼して
寂く多る帰軍の相ハ。淫あるやらんと看てやるゝ。大将勝
家ゝ有りるゝ田へ。城中の周章方ゝ〳〵ゝ。遂分ゝ惑る
ゞりゝ。當城の留守人。柴田孫右衛つ。中村文荷富倍
勝家の前ゝ出。迫遺軍紋北の始終を問つ導つして共ゝ
嘆息ゝ〳〵ゝ。了得の勝家爛意ゞ。まづ牢城の方
計をゝさんと。區く猪下へ向しめさんとゝ。柴田孫右衛つ
承所り。いそぎ廻文を書記て。牢城の車を催さる。然りと
いへども微勢ゝして。二三の丸を漸くゝ。人数配りゝせし

ろども。總結柵ハ壓寄糸あり。疎屏ハ備仕て待受うし
ハ。哀也無計次第あり〻〻
羽柴殿入載糸直攻北庄　父子對面
風を聞て六郡勇し。日を計て又戎平らぐと。張九齢が紙
しある相也。粤ハ視るあり。羽柴殿糸寄秀吉ハ。謀計十分
ハ成就して。佐久間玄蕃とたしめと。柴田ハ一族九分ハ擒
得て。追孫まるもどハ。其逆條ハ金屋が嶽。盃屋の長嶺。鹽
深山。無見の權現坂。あるひい名井尾口山。庭戸濱〻〻。
の浦。門盃池原。行一ゞ峯。小谷河原までの間ハ。羽柴が孫
ハ撃捉首ハ。おゝそ四百八十條級。活捉三百六十條人。栗野山
の陣陣して藏級実検せさせ〻也　當日ハ逆地イ

一宿〻〻〻。曉也ハ四月廿二日江ゆと進発あり〻。城久右衛
を先陣たり〻〻ハ直地ハ就糸へ亂入し〻ハ。然ども柴田勝家
ハ。自殺と覚期を。決し〻るの〻あり〻〻。殘ハ不撃果さ〻〻
防禦ハ為べき糸もあらをべ。北庄までの途中の要路。何國
ハも遮支の糸と止めぞ後ハ敬と通さ〻む。これハ固〻羽柴
が軍勢。苦もまふ府中へ迫きつも。佐勢と城南ハ留置も。秀
吉ミづ〻〻加爲虎之助一人と供せらも。府中の城門ハ到らも
ゆひ。又左ゝと大青ハ呼あり〻〻ふ番兵秀吉と知ざれど
大ハ驚き大実より。八束面出し〻て誰そと問。是ハ羽柴秀吉
あり。主ハ對面〻〻と宣ふ。番兵聽て周章忙。これ就幸
鄙へ通達〻〻ねバ又左糸つ取敵も。平服ハ〻只獨。鞭と倒

ホまるだろう出迎て対面ホし。又平てく面目もホき造化ホり。来日到腹つかまつり。故ホ戮力セし解嘲。いろをべしと
ありくると。秀吉頭と左右ホうち掉。斯ハ満心しき言ホり。
疎略ホくざる古明輩の。逆ホ心底も蘊むことホく。密合さ
る交ホる ホ。今更ホんの隔心あるべき。他軍とホり自軍
と ホるも。武門のホくひホるもの城。君いらでろ足下と恨
まん。惜て這遭の合戦ホ。出陣せくまぬ心中も。快より察
しもふせホり。今ハ柴田滅亡せんとホ。然ども天下の
大事と抱へ。縦令ハ憑又の故ホもホ。自分とホべき時
節ホる ホ。別て足下と吾ホ交ホると。向後のるハホまくまを
と只顧怙く存ぜるホりと。水魚の情と伸るへハ。利家ホも

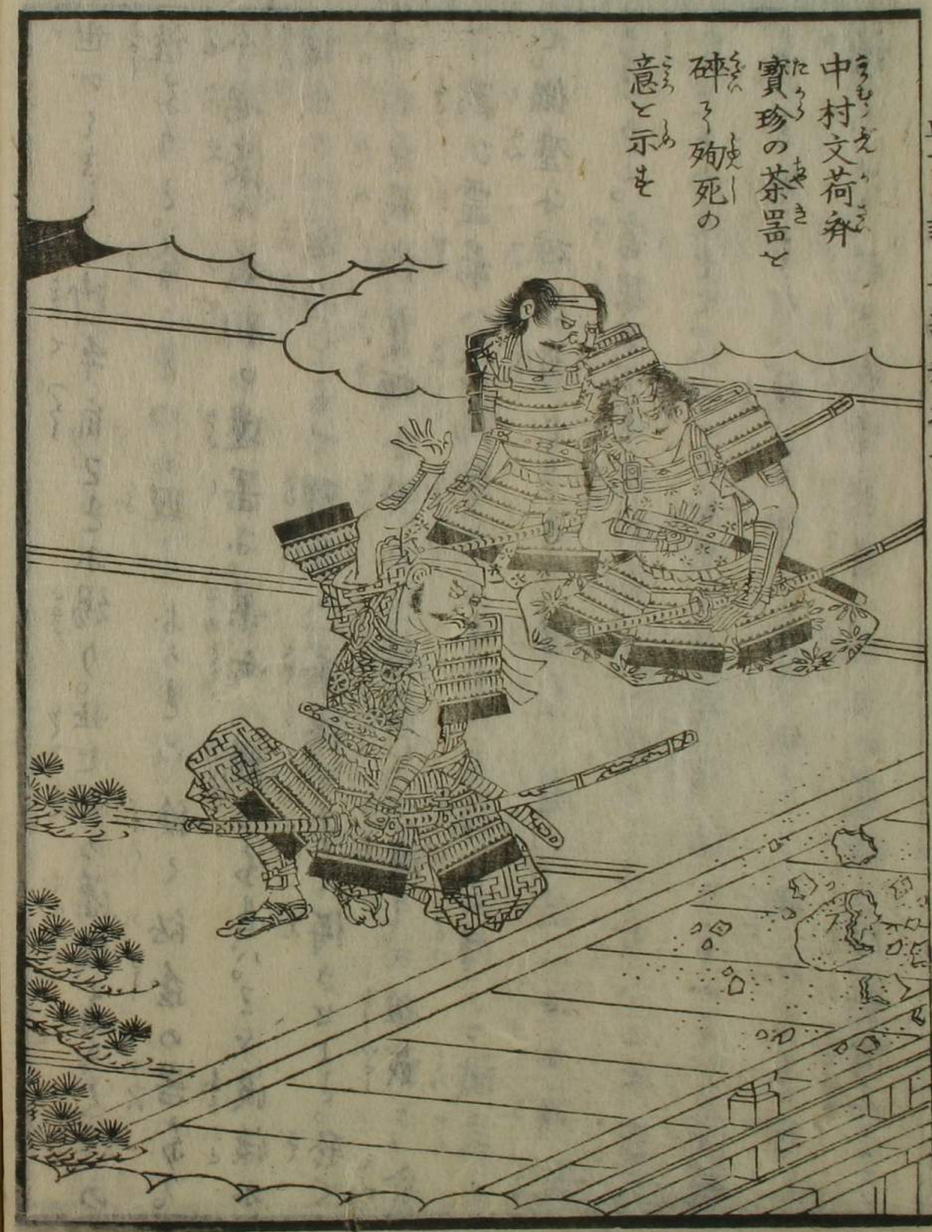
く感服ホし。森慌ホくさホくざる色状。秀吉ハ試て取く。
猶も心と試量んさも。這上ホも特むべきハ。北の庄への導示ホ
り。疲労ホぐく望さしと。宣セホ利家。斯ハ切き御従ホを
ども。相成べくハ免ぜくをさし。是柴田家への存心ホり。眩
目までも誰下ホるものと。いろホ命ガ惜ろれバて。勝家を
攻る案内を。何容くとハくろまつられぞ。此ともつく這一
義ハ。怖くハ御免ぞふと。稟セホ秀吉殿他と為と掬。他軍
ホる。よく こそ信と達らをされ。強ホ感ぜるホ孫りホりと。
移度稱義しつ後の姑終盟約せくを。別て其夜ハ府中ホ
る。服部辺ホ宿陣せくれ。明九三日ホ。北の庄へ推進くり。
婚久右郎と魁軍として。こくホ又ケ條の従と達らる。時

今挿苗の最中なるべ。かなるぞ農夫ハ過失させまじ。
とて。放火の車ハど強堅く戒しめ。只惟孫伍と嚴重ハ
去て。塩を百重ハ推捏巻。總構を燒立らゝ煙の中より。
弁丸下へ行策をつけ。裏くと攻蔓う。時ハ大將秀吉ハ。
此の在の向山なる。愛宕の嶺と向城ハ準。城中の相を陣
覧ある時。城中の兵士弦孫と合せ。掃除へ進る敵と覘
徹て三百餘挺。鳥銃一時ハ連発ろけ。これハ当りて乱せ
る軍。三百餘人ハおよびぬ。形柴殿愛宕山より這態と
陣覧あり。法士ハ向ふく宣ふゆう。今這城ハ凝守ゆる
兵ハ。敗北の後ハなきべ。百分一の人数なるんぞ。不得ハ名老
し。勝家ぞ不行。大張と謂つべし。這上ハ渠ハ英ともと

せ。最期とゝの信ハ做せよやと。纔ハ稠鬱を解せうう。此ハ
おいく北將勝家。自方の勇士ハ言ゆう。新の如く敵兵の。
迫づを進るうへ一戦して俺ゝぶ。暇せざる心庭を須もべく。
冥途ハ往ても。閻魔の廳の印ハせん。各續けといふ泉ハ。
無人のよゝ視徳う。金の五幣の馬標を。正剱ハ推擦させ。面
方の圓風と八字ハ開ケセ。腰風の像く突発ハ。先ハ進くし
城ゲ源仙を。八割九裂巴字十字ハ。淡の四くまく當るまく。緩
横無礙ハ掛て西走。久太郎秀政も。軍傷熟練の首將ハ
バ。自幣ハ指揮して柴田勢ゲ憤死猫ハ當るべくく。量ようく
對闘るふせべくくて。中を開て通しうう。勝家主従。おもひの
まゝハ接虚ませ。颯と退て亦再落。背方より撃て発。素山

羽根田が隊伍を擻起。血戰してぞ退取る。其勇猛人を つ
昔日。瓶を破て六角が。進退を崩しあり る時ハ。芳るまじ
と僉議ふ稱嘆してぞ休ざりける。新て赤勝家ハ。思の侭ハ
烈戰ふ。今ハたゞ是まであると。中村文荷斎を呼迫づけ。
指圖せ〻ゑて信長公より拜領せし。天下の名器數殿。大
書院より小書院御廳莊嚴立る其中ハも。別て耳目茂
敷ゐまるハ。牧溪の筆の彌布袋。これハ虚堂が贊ゆ〻しくと。
小書院の床ハ長く飾。赤大書院の壁畫ハ。無準の筆の
達磨の像と正中ハ拙。その左右ハ龍虎と副て。名番名花
と寶器ハ盛り。愉快狂俱して。勝家年自ひとつの茗器を
拔出し。文荷斎ハ稟されるハ。斯も這茶器ハ。亡君御在

世のゝきり。御年自ゑをハ湯り。北七國の藩鎮ゆる。大任の
證なりと。命らきつも覬しおろもぬ。秘蔵の器なり。
今勝家が最期の遺器ハ。果方ハ繞る赤色バ。ヨゞ没後ハ
懷出さバ。這器ともて碑茶へ。茶湯として得させよと。聆て
中村文荷斎隻頬ハ笑して彼器と。三遺まで推戴き。命
ハ隨ひ霊茶へ茶湯撃上もふさんと。言さゑ持る鐵斎ハ
て。微塵ハ碎き辛〻り。勝家ハ看て。佐ハ汝も我弱
まるゝと。言呆させぎ文荷斎。這ハ恨めしき命ゆこそ。君ハ
別ゑまめ〻せて。いろでゝ此世ハ君獨。殘留りるふをべき。御情
あやと怨ぎれバ。勝家ゆ〻ひハ感佩ふし。弱死ゆまを及ふ
約〻〻り。佐ハ亦羽柴秀吉ハ。同日の晝過る頃。愛宕山より


中村文荷斎
寶珍の茶器と
碎く殉死の
意と示す

強勢を出され。氣屈のより城ゐ推進。孫位と嚴重ゐして。強攻る氣色もなく。搜卷ゐふむるり。秀吉儼と思慮し玉ひ。法將ゐ向ふて宣ふゆう。勝家運命盡きりといへども。勇氣いまゞ弱くゝ。這上とても自方の兵の損ぜぬるゆえ。ちいち一ゐ生。這ゐひとつの工夫あり。先日ゐ生捉る。盛政勝久と牽出し。城將柴田勝家ゐ。最期の辭別せさせたゐば。ひとつゐ情を深ふ信義を含ませ。ふゝ河ゐハ勝家ゐ勇氣と碎くの理ゐ足り無きれば攻ぜといふといへども。快落城ゐ赴くべし。料理をよく宣ひられば。いつまも至理ありと感じて。頓て先孫の婚久を郎所承ゐ。玄蕃擁六兩人と。綁められて牽出し。面方の門ゐ近づき倚。秀政大青ゐ呼ばりるゆう

見ハ羽柴の魁將堀久を郎秀政なるゆ。株梁の命をうけ。ゐゐ科理一義あり。柴田擁六佐久間玄蕃。這兩人を活捉しゆ。猶陣中ゐ存命させゆう。終理進敵の左命中ゐ。別註させもふさんとゆ。見まで保ひちんべりぬ見糸ゐをと呼ばりつも。肱をを緩めて兩人を。面方の門の側近く。牽出しる所行ハ。無量智とこそ知まと

勝家貪態對面盛政勝久一屬ゐ各約束

死と決しゝる一會ハ。其怒哀樂總て。凝て識石ゆう猶牢し。態も當人ゐ帰らしゝめ。恩も當人ゐ帰さしむ。然ハ然心ハ結ぶべゝゝ。恩いゝゝ行ふべし。秀吉ゐ至減の者の怨をもて。ゝ縱しむること。強ゐ強ゐ至智と謂つべし。然ハ玄蕃も擁

六も。城門際ふ拏出され。今更面目なしとおもへど。今生の極別惜まれて。勝家ふ逢たんとおもひしも。阿容〻〻拏れて来りしあり。面門の兵軍斯と郭へ通達しられば。勝家発即寨搜ふ登り。門外を儼と窺て行ふ。おさけあくも盛政勝久。眩まへるゝふ緩められども。郷めらをてうち衰無。拏出されるその来相。ふるふ目も暗心も折ぬ。鬼をも欺雖勝家も。吾子と勝の郷姿眼前ふ拏られ。ゝゝ多の武運の拙ふさよと悔る泪留敢ぞ。言ふことさへ得あるまじして。猶要時ハ黙せしゝ。濡陰声と勵まして。存命ありしゝ玄蕃権六。遠遷軍の彼をつゝハ。盛政ゝ過失といひふゝら。原来定る天命ふ是ば。今更何をか悔むべき。今ゝ今まで世俗の。行方いかゝありつるこゝ。案ゝ頻ひ在しふ。最期ふ近で対面せしこと。逝世の望これふ過ぎ古健今来名将勇士。擒と為ひ例多し。かゝるまむ恥とおもふふよ。君も昨今自害して。冥途あゝ再び逢たん。只此上ハ尋常ふ。死を潔ふいさぎよべし。秀吉と君と甚初。一戦ふ近びしこと。志ハ違ども。金瓶織田家とおもふゝ。天下の為主君のさめの戦死をも恥ゝしらず。勝敗も定りあり。運の窮達是非ふ及ばず。聖賢の子孫といふとも絶ざるふあるまむ。悪逆の家ふ生ども。栄ざるふあるまむ。悪逆天運のいさをところ。私ふこれを量りがたし。栄ゆるとも羨まじ。枯るとも赤然ふし。逝世ハおくを

さきぶれとも。冥途ハ同じ衢ぞや。相待べしといひくるふ。玄蕃ハおろゝ並ぶる。他軍も自分も一様ふ。勇氣を折き潜くとして。徨の紳を濁しゝり。格別搦六勝久ハ。弱年の素ゝ相もあくて衰こと。悲嘆の涙ふこれくるゞ。玄蕃弱き氣色とこんせドと。涙を襟ふまりつけく。顔棹揚て山魏しげふ。嗟面霞ふり逸遺の軍令。義遺とるふ陣教示のあゝ。ゝみども。巨勇ふ奇てこれ紋用ひぞ。逸ふ敗軍とあるのゝ。活る落城の根絶して。所命ふも迫びしこと。食ふ居ゞ不為ふ是ハ。今文鮮失ふ汗もふ。只唯偏ふ陣教あとと。有係ふ暴き號勇の。心も涙ふ晴果く。言語案を衰さと。勝家驕て。然のゝ心を悩むべゝゝ。是天命ふり。悔むふ迫だゞ。逸上ハ迫ふ黄泉

の同伴。ふふりの歓哀ふり。かゝゝゞ歎くことるべゝゝゞ。快く景期を急ぐべしと。言奉て寨樓と下ゞ。玄蕃搦六も涙と擁へ。心と決して。久右郎倍ふゝち嚮ひ。当歓ふゞゝも秀吉ハ。信孝賢ふ勝家ふ對面と許させゝゞ。最期の辞別をふし。今生の歓悦逸上ふし。尺時も速く首を刎く慚愧の憂味と授ゞせ玉へと。思授て述ゝるふゞ。塚秀吹も其初ハ。蹟ゝゝゞりし交せしゝゝ。今更不便の事ふおもひ。偖ゞふゝゝと鷹して。山口副田ふ命じつゝ。後陣へこそい送せゝゝ。備も城將勝家ハ。後敵へ投来り。北の賢ふ身近ふ侍宿御女ハ原来秀吉のさめふ。主あり。我亦淹しき熟親ふもあゝゝゞ。然ゞれバ故ふ帰しゝゝゝる。秀吉ハゝゝ告ゝとハもゝゝゞ。御婦のゝ

豊臣記七編巻之九

秀吉の神智
盛政勝久と
志ゝ柴田
勝家ゝ死期の
辞別をあさ〳〵む

くハ三女まで。彼ハ蓋命させん緯の。傷ましさよと稟を戎聆ハ谷の賢ハ眉間と苦ふし。ちもひげふき命ハこそ先年江州淺井家ハ嫁づき。長政の妻とありしかハ谷落城の機会ふ。藁沽長政ハ異論くと虚縛され。信長の許へ送帰され。千精方ハの辱と歎りしさへ抔憾きハ去年改公へ迎へられ。今ハ秀吉の方へ由き。憂味の耻と見んようハ。公と双を共ふ。して。落命せんこそ千歳の末。長き齢をみるこんより。遥ハ惰る歓哉ふ。既ハ自殺と変る戎勝家おもて推止め。備ハ源くも契らざる。我と然まで不憐念て。畢命と同しふせらるるよハ。いとく暗しき沛家あり。武家ハ憐る緯ふ。我ハ長政と不存違ふく。縦令沛婦の方より帰ふく。

秀吉の方へ行んといふとも。離ぬまじとおもひしふ。よくぞ同究の睦まゝまる。忝ハ秀吉やと。極ふ交勝まるだろ。伝傳の情淺らざりし

勝家以三女送羽柴殿陣 附 三女賢行

水ハ精しくもバ源き戎厭すぐる山ハ達ぬもバ険きを恐まざ人間の逐悟ハ相似たり。勝家最期ハ心遺もて。室家こ共ハ死と並まること。共命鳥の執着あるハや。雙蔕蓮の自然て同剃まるもの紀。時ハ勝家游て言らく。這期ハ汝と神女とハ。義信のさゝふ死と共ハ不まる。共逆ふきハ不ざれども。不役ある八三人の女子あり。渠海ハ

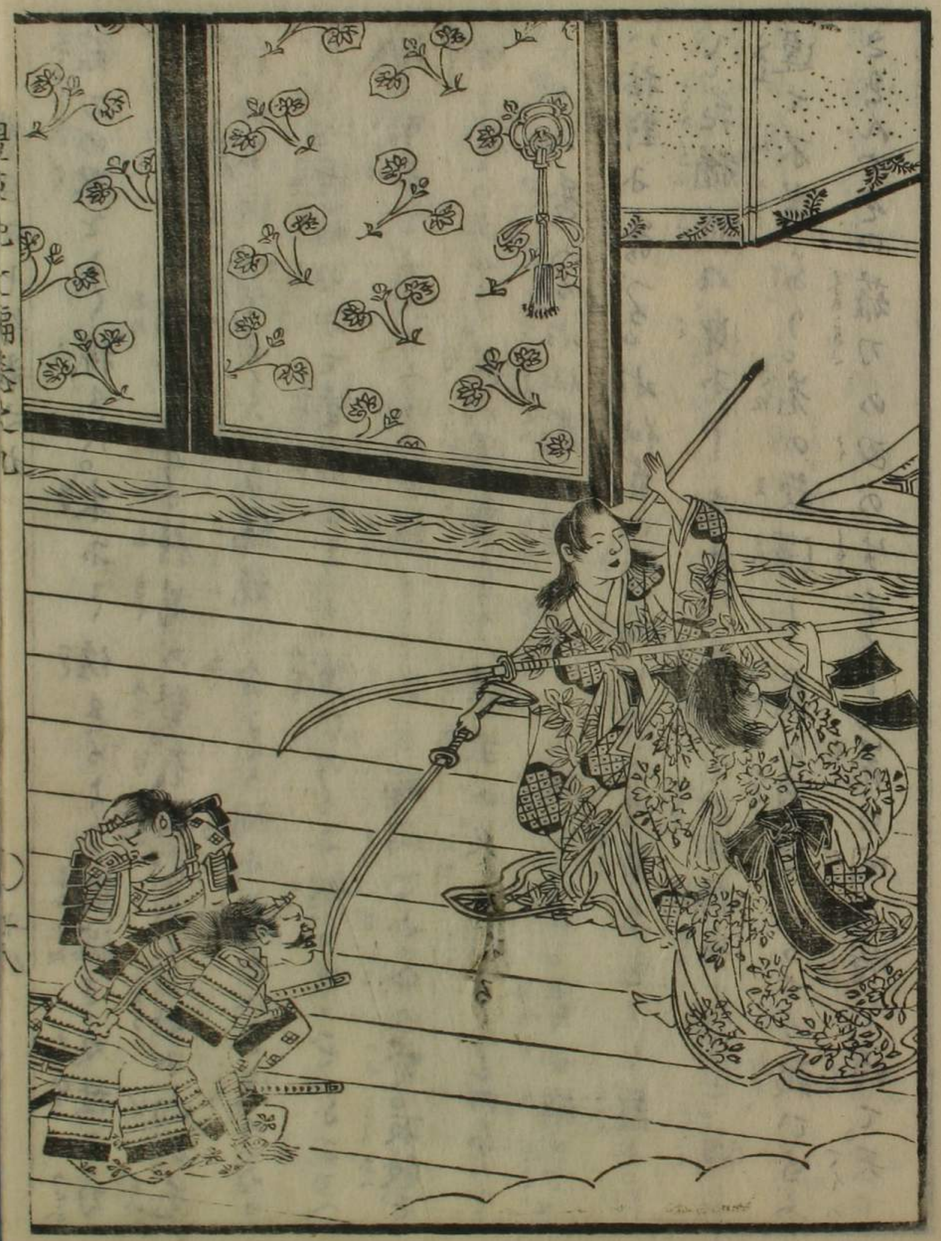
義ハ三人の女子といふハ姉を於市と名く後ハ第光院と号して秀頼家の室なり 紀

緑十二年己巳の生まるまバ此年十又九歳 甚次郎年の出生ハして今年十九歳 その次とお絲といふ元亀三年中の生こて十二歳

後ハ秀忠公の改所と云　是長政の亂といひ。秀吉ハ太王分なり。然れ
べ疎くもあらぬまじ。疎ハ相好器量まで。千万人ハ超うの
ろ。陽緑ハつき陰閉ハつき。これより姓氏も名とられた。猶
頼ある児顔あり。渠倅ハ秀吉ハ特まんやと。稟し出るとハ
谷の方も。警られる機舎こそあれ。一室の紙門をゆるひき
開。三個の女子走出つも。各短き薙刀強提。勝家ハ茶ハとと
つき。言辞ハ言発るゆ。童侍三個ハ淺井家の。鼠とだし
おかされて養父ハあさけ薄人也。所心を満ふ。直ハ
御辞別つるゆ。此より淺井家へ立帰らん。おさべあると
雖つも。頼て母より縁し。三ゐの薙刀打拝て『これハ越路
の父母へ別離の朝の一曲。お人目ハ久しまゐせん。暗日まで

も今日までも。四海ハ貪兄弟あり。老ゆるハ皆父母あり。お
もふ心のあぐしの野や。後の縁のたゆちれハ。見奇らゆ悲し
きよ。晴ふき叫木まゆ。冬来ぬまバ一育ハ。拯ゆ時と違ハぎ
りし。今父母ハ先亡きて。拯蔵つる霜草ハ。鬼のおこともい
ぬおやまゆん。その尊と受んより。潔く紅ハ花と用うゆ着
ぜもふさんと縊ひかぶる。袖の薫の休まぬ際ハ。ふんぐくも三
個の女子ハ共ハ。薙刀正逆ハ持整し。喉へ哦喉と渦紀まバ。
勝家周章推止ゆと。小谷の賢ハ身動ぎもせず。葉しき
声言らゆハ。死きべき晌の至られバ。死まるも却て恥辱也。
母が快ゆり科理られバ。死んとて死あるべき。母ぐあさゆハ紙
へし薙刀。よも喉ハいゆまゆと。猶きて三女ハうら驚き。

小谷賢三女ゑ
教へて最
期の
別離
泣縋白
ちゑ


豊臣記七終巻之九

薙刀の刃とよく視きば。木ふく俤もるよう猶深き。又桂の刀
あり名も忘。嫌あり名於菊の賢。気質ぶく母ふ向ひ。先
刻母ゑ遠刀と。ちちハふ湯殿て金ある河ふ。此とべき道のある
ふくらば。遠薙刀ふて生害せよと。宣ひ名ふ似るもぞ。ふ刃へ
浦る刃器ともて。ちちハふ湯うしぞと。鞠問とふ谷の賢。取敢ず
喻していふゆう。其ハ愚魯あり草木の。冬ハ枯るものふう。
ふふふ秀づる水仙花の。雪と冒して開くあり。貴女侍二ハ
ハ結野ふ秀づる。水仙花の雪間をつよう。碧まを〳〵盛ふし
て。花猶放ぬ身ふしあきば。反叛と共ふ枯去んこと。道ふ
違て不孝あり。先の秋澤し霧の恩と。いづれ報ひもふ
さきんやその薙刀の刃の生ずると。花の開く時を待て。天下

ふ氣と拔ぎへし。母の名ともて達べきものハ貴女侍二姑が身の
上ふあり。かあ〳〵ぎ思違ふせそと。況喻さきて不得ふも後子
天下の政所ふる萌生と此朝ふたやくも怙得し。此を止りて
母の言ふ遵ひる。これふ因て乳獲ある富永新六郎奥村
九郎次を相副らき。嫡嬢三十餘人ふ看獲ふさしめ。羽柴が
陣へ送り遣ぬ。勇氣烈しき小谷の方も。有係ふ母子の
慈愛ふひろき別離のいとぐ苦しふて。致行の泪席上の葩
の筵も濕ふ如く。愛別離苦の骨肉とも裂くぐりあり
名ら新てい果ドと送出ふ。富永奥村悠然と。三人の女を
看獲しつも羽柴殿の本陣ふ到り。勝家の口係を舒三
女の轎輿を掃投名ふぞ秀吉叮嚀ふ對面あり。富永奥

秀吉ゲ許へ
三女を送り
勝家天命を
残ふんざらしむ

村西人ハ疎ゝ〻ぞ労補心底。成長の後ハ冥ゆゝハ科理べ
しと懇切ハ。應答し玉ひるハより使者西人も安途ハ
し城ハ返りて遠由と賜家ゝびハ小谷の賢へ。吉條ハ返
びたもい。ゝゝとゝゝぞ歓だも。今ハ遠世ハ一路の。心ハ霞
る雲もゝし生害せざやと。準備とぞせらるる

繪本豊臣勲功記七編巻之九了